

『国際協力のひとこま』 ④

★受託事業事例紹介／マルチセクターで取り組む栄養改善コース（実務者向け）

—現場での実践的演習を通じて学びを深める！—

ここ3年間、世情の状況（新型コロナ問題）に対し、少しばかり変化の兆しが見え始め。つまり2022年後半の数か月は、世界的に新型コロナ感染の縮小基調になったようですね。また、日本国内でも重症の感染者数が、徐々に減少に転じました。

そうしたことからでしょうか？日本国内でも、政府による海外からの入国管理が緩和されたこともあり、我々の事業において、重要な対象である発展途上国からの研修員の来日・受入が一部ではありますが、再開されました。それ以前3年ほどは、これまで研修員受入事業と言いながらも、**受入**ではなく、**遠隔**（オンライン）対応が主流となり、対面で感じていた暖かいふれあい場面などが、画面越しとなり薄く、オンライン講義を実施していても残念な思いがありました。それが、前述の通り、研修員の渡航条件が整い、来日（受入）での研修を実現出来、やはり、お互いの面と向かってのやりとりの楽しさ・強み（コミュニケーションの風通しの良さ、研修への集中度、視察を通じた手触り感のある学び等）を感じながら、進めることが出来ていて、嬉しく思います。

特に、今回（2023.2）は、普段（コロナ前）から海外の研修員受入等にご支援、ご協力をいただいている農村地域（農村部）のいくつもの住民グループ、町関係者のご厚意（ぜひおいでください、とのお声かけ）から、研修プログラム企画において、研修拠点（センター）でのプログラムばかりでなく、数日の短期間ではございますが、地方宿泊での視察・実地研修日程を組み込み、進めることが出来ました。

より効果的となるよう研修開始となる約2か月前から、事前に相互の打ち合わせなどもご対応いただき、今回の研修を通じ伝えたい目標を体感出来る様、受入ご協力関係者と実施主体である我々の間で、下打ち合わせ、先立っての準備を入念に進め、ようやくの参加研修員の訪問となりました。

今回の研修員の感想・気づきから、一部ですが、学びの例を以下の取り、ご紹介いたします。

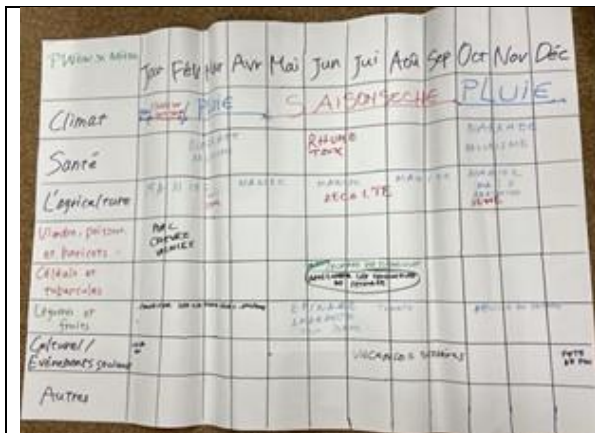
今回のコース受入は、アフリカ諸国からの研修員で、彼ら担当する地域の住民の栄養改善に係わる中央・地方行政官が受入対象です。彼らは今回の学びを通じ、帰国後すぐに担当する地域内の集落において活用できる実践的な学びとなるよう、次のような生活改善アプローチツール演習にも力を入れました。具体的に学び合い出来たツールは下記の5つが主なものです。

- ① 24時間思い出し 食事調査法
- ② **季節カレンダー**
- ③ 水・衛生の状況確認（PHASTアプローチ）
- ④ **環境点検（水・衛生確認）**
- ⑤ **幸せツリー**

特に、下線を付しているものについては、今回、地方視察・演習させていただいたもので、受け入れていただいた町関係者の多くにご協力いただき、各農家さんへインタビューを行いながら各ツールの実践的な学びを行いました。（次頁写真一部参照）

こうした地方での学びは、ある意味、参加研修員の自国の生活環境・社会状況に少しばかり近

い（日本の大都市では見られない）環境でもあり、研修員たちは、積極的に演習に参加し、エンジョイ出来た様子でした。



季節カレンダー。演習では自国の1つの地域を想定して作成。雨期は病気が多いため、水回りをきれいにすることで改善できるという介入アイデアや、繁忙期と病気が重なり病院に行きづらい現状はないか？といった議論を行なった。松川町での実践では、見える化しやすく、分かり易い手法であるとの感想も聞かれた。

水・衛生の状況確認（PHASTアプローチ）。排泄物がどのように人の口まで辿り着くのか、そのルートを討議する。活用案として、「自国の村や人の名前を使い、自国のストーリーに落とし込むことで展開していきたい」という意見もAP発表の中で出てきた。

そんな楽しい研修ですが、同時期、立春以降とは言え、まだまだ冬の季節が過ぎておらず、大雪など、冬真っ盛りにみられる寒の戻りがあると言われる最中、視察最終前日からは、窓の外に深々と雪降る中での演習でした。（前回（3月23日掲載）ご照会記事参照、詳細省略）



住民グループ様にてりんご加工の体験。「アフリカの男性が調理台に立っている！」と女性研修員陣から驚かれる一場面も。



研修員たちは初めての雪に大興奮。見るばかりでなく、初めての雪かきも体験。（雪の影響で予定の帰路スケジュールを延期。）

さて、こうした地方の町での学びを通じ、研修員の皆さんが感じたこと、気づきをいくつかご紹介いたします。

- ・ 自国には、栄養に特化した調査が制度化されていない。学校レベルや世帯レベルの調査があればより良い栄養改善が実施（応用）できると思う。
- ・ 家庭菜園においては、同じ作物づくりでなく、輪作が重要ということを理解した。豆類、野菜類など順繰りに栽培し、病虫害被害を避け、生産性も上がり、食生活も多様化する。
- ・ 乳幼児の健康検診の中に、身体的な発達（成長）だけでなく、こどもとの遊び・ふれあいの時間が設けられるなど、社会的スキルを向上させる取り組みも含まれていたことに驚き。

こうした国内（地方）での日本人たちとの触れ合い含めた研修事業を通じた開発支援の成果は、年1度の研修で、大きな変化を生み出すのは、難しいことなのかも知れませんが、複数年の継続（繰返し）的な技術移転を複数の研修員に対し知見、ノウハウなどをインプットすることを通じ、各国の学びを得た研修員たちが増え（点；研修員）、人材づくりに貢献するとともに、学びを応用していただき、普及することで、面的（職場、さらに地域）に拡散していければと思います。

ひいては、各国のSDGs 17のゴールのうち、【ゴール②飢餓ゼロに】ばかりか、【ゴール④すべての人に健康を】などの改善の一助になることを願いつつ、研修事業を続けていきたいと思っています。

最後になりますが、〇〇町の皆様、受け入れ、ご協力に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

以上

（文責・事務局 浅野）

#相互協力 #農村環境 #栄養改善 #健康 #健康 #健全な成育